

優しい女房は殺人鬼

北杜夫

しい女房は殺人鬼

北 杜夫

新潮社

やさしい女房は殺人鬼
にようぼう さいじんき

定価八〇〇円



発行 昭和六十一年八月二十日

二刷 昭和六十一年九月二十日

著者 北 杜夫 (きたもりお)

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒東京都新宿区矢来町七一 振替東京四一八〇八
電話 業務部 03(26)五二二 編集部(26)五四一一

印刷所 株式会社光邦

製本所 株式会社大進堂

© 1986 Mario Kita, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送
付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
ISBN4-10-306223-1 C0093

優しい女房は殺人鬼

装
画
久
里
洋
二

自分の口で言うのもおかしいが、私はやさしい、繊細な心を持った男である。わるく言っても小心なのであって、横暴、野蛮、残虐などという言葉とはおよそ縁の遠い男だと思つて頂きたい。私は童話作家、或いは絵本作家と呼ばれている。私の書く童話には、人魚、小人、可愛い小さな動物、同じくあまり大きくない樹木の精やキノコなどが出てきて、みんな人間の言葉をしゃべる。あまり大きかったり、猛獣であつたりする動物は私にはおつかなく、氣持がわるくなつてしまうので、まったく登場しない。

もちろん百獣の王である雄ライオンが、雌の小羊にむかつて、

「わしは心底から君を愛しているから、結婚しましょ」

と告白することにしてもよいのだが、これはいかにも不自然なことであるから、そうした筋も書かない。

いつぞや、パンダが日本に来ることになったので、そういう可愛い動物を心の底から好きな私は、わざわざ上野動物園まで見に行つたことがある。ところが、写真や絵で見るといかに可憐

なそのパンダの実物は、意外にもすこぶるでつかいので、私はそれだけで気持がわるくなってしまう。従って、私の童話にはパンダすら一切出てこない。

また、最近コアラが日本に来ることになって、これも可愛らしい動物だから、実物を見に行くと、なんだか凄い爪^{つづ}を有していて、あれにひつかれたらさぞかし痛かろうと、私はすっかり気持がわるくなってしまう。従って、私の童話にはやはりコアラも一切登場しない。

むかし、或る絵本に、小さな動くことのできるキノコを登場させ、小人と遊ばせることにして、そのように文章を書いたところ、画家は赤い傘に白いボツボツのあるキノコの絵を描いた。一見いかにも可愛いが、あきらかにベニテングタケの類^{なひ}で毒茸^{どくきのこ}であろう。これでは小人が中毒してしまうので、あまりにも気の毒で、せっかく絵本ができたのに、私はまた気持がわるくなってしまう、半月くらいも寝こんでいた。このように、私はまことにやさしい、繊細な神経の持主なのである。

しかしながら、そのような私の書く童話がいくらでも好評かと言うと、まったくその逆なのであった。編集者はずけずけと言う。

「大岩さん（この姓は本名なのだが、私は嫌いだ。いかにもこわそうで、気持がわるくなる）あなたねえ、今の子供はパソコンで遊んでるんですよ。今どき、小人やキノコやリスばかり出てくる話は流行^{はや}りませんよ」

そう言われても、それ以外のものでは、すぐ気持がわるくなってしまうので、どうにも仕方がない。

しかしながら、そのような童話作家、絵本作家では、とても食べて行けぬことも事実である。そのため、本当は人には話したくないことだが、私は自分の意にそわぬひどいメチャメチャな仕事もずいぶんしてきた。

たとえば、私がやつと童話作家として出発した頃、世を風靡^{ふうび}していたマンガは手塚治虫の「鉄腕アトム」だった。同時に、横山光輝の忍者マンガ「伊賀の影丸」なども有名だった。白土三平はまだ貸本屋で一部具眼^{ぐがん}の士にしか知られず、私はその名も知らなかった。もつとも彼のマンガは相当に残虐なシーンがあるらしいから、やさしく繊細な神経の持主である私がもし見たとしたら、たちまち氣持がわるくなってしまうことであろう。

その頃、今ではまったく忘れられてしまっている或るマンガ家が、およそ荒唐無稽な忍者ものを描き、けつこう評判になつていた。そのシリーズは粗末だが大判の本となつて十何冊も出版されたのだが、あまりにも荒唐無稽であつたため、また当時は世の教育ママたちが「俗悪マンガ追放」としきりと叫んだりしたため、出版社ではそのマンガ本に「日本歴史に伝わる本物の忍者」という三ページほどの欄をもうけ、その文章を私に書かせてくれた。編集者が資料と称する幾冊かの本を持つてきてくれたが、べつだん日本歴史とは関係もない、これまた荒唐無稽なものばかりだった。私は自分の素質に反する物語を金のために必死になつて書いたが、なにしろ忍者という奴は手裏剣も投げれば鉄ビシもまく。火遁^{かとん}の術ではうっかりすれば火事も起ろうし、児雷也^{じらいや}のごときは化物のような大ガマを出現させる。私の好きな可愛いアマガエルでなく、氣味のわるいガマガエルである。とにかく忍者というものはやはりブッソウで氣味のわるいものだから、十枚

ほどの原稿を書き終えるたびに毎度、すっかり氣持がわるくなってしまうて、そのあと何日も寝こんでしまったことを覚えてゐる。

それに比べると、私の親父は勇ましい性格で、愛国熱血冒險少年小説の作家として、戦前はかなり名を売った。その「愛国」は今の世なら、当然「軍国」と言いかえて然るべきものであった。親父は太平洋戦争が始まると、更に熱狂して、大東亜共栄圏にはいるべき、インド、東南アジア、ニューギニア、ボルネオ、さてはニューカレドニアなどの太平洋の島々などに関する本までをどつさり買いこんだ。いずれはこれら地球の半分を舞台とする雄大極まりない熱血冒險小説を書くうと意図していたのであろう。しかし、いざ日本が負けてしまうと、極度にしょんぼりしてしまつて、二、三年のあいだ死んだようになっていた。それから、ようやく平和愛好者となつてよみがえり、『ヘレン・ケラー物語』などかなりの量の子供むきの本を書いた。これは往年の熱血冒險もののようにうまく行かなかつたけれど、一人息子の私に大学教育も受けさせ、戦後までもなく死んだ母の墓も作り、お金はまったく残さなかつたけれど、戦災にも会わずに済んだ郊外とはいえ確かに東京都内にある一軒の家と、大東亜共栄圏と関わりあるかなりの蔵書を残して死んだ。

こんなことを書く私にしろ、やはり戦争中は軍国少年であつた。まして、一般の軍国教育のほかにも、年少の頃からつい親父の熱血冒險小説に読みふけて育つたせいであろう、人一倍の大軍国主義者で、中学生の終りに軍需工場に動員されていた頃は、それこそ神聖なわが本土にまで空襲なんぞ始めやがつた憎つき米鬼、ヤンキーどもを皆殺しにせよという精神にこりかたまつていた。それが完璧に戦争に負けてしまったもので、たちまち勇ましかつた親父の存

在、自分の存在を後悔し、こうして極端にやさしい、繊細な童話作家となってしまったのかも知れない。

軍国少年であつたなどと書くと、今の私はもう気持ちがわるくなつてしまうので、もっと自らを慰めることを記せば、私の女房は、これまた優しく、親切で、利発で、私より十二、三歳も若くて、知人に言わせれば未だにかなりの美人である。まことに非の打ちどころのない女性といつてよい。このような女房をもて、私はどんなにか幸せであることか。

やさしく繊細な童話作家が、どうして「妻」と言わず「女房」などと記すのかというと、それは私の年齢のせいだ。近ごろはよく昭和ヒトケタという言葉が使われるが、若い人に言わせると、昭和ヒトケタの人種はカビが生えるほど古びていて、ものわかりが甚だ悪く、おまけに鈍重でガシコなのだそうだ。オジンどころか、もはや老人なのだそうだ。私が青年であつた頃は、昭和生れというだけで若さの象徴でもあつたのに。私はその昭和ヒトケタどころか、その長老、元老に近い存在である。昭和ヒトケタは前述の欠点も持つが、また不器用な照れ屋でもあつて、「妻」などという近代的な、しゃれた呼名は恥ずかしくてとてもできず、どうしても「女房」になつてしまふのだ。「親父」にしろ同様である。

女房とはもちろん見合結婚だつたが、その名前を美喜子という。とにかく、自分で美しいことを喜んでいる意の名前なんぞ持つてゐるせいか、未だにかなりの美人だと知合からは言われている。もつとも私がそう思つてゐるわけではない。なにせもう三十年近くも一緒に暮してゐるのだから、たとえどんな美人だつて見飽きてしまふし、それに私より十幾つ若いといつても、なんと

いってもうかなりの齡で、小皺だつて増えてきている。それでも、私は知人の奥さんたちから、「美喜子さんつて、本当にいつまでもお美しいわねえ。大岩さん、あなたは幸せだと思わなくちやいけないことよ」

などとしばしば言われる。

もちろん大半はお世辞であろが、女房は、私がこわがらないほどの小柄な背丈だし、長年見づづけてきたその顔を、かなり間近からいくら眺めてみても、ずいぶんと繊細な私がべつだん氣持がわるくなってしまうこともないことからおして、大ざっぱに言えば、やはり美人に属するであらう。

美しい女はバカであるという俗説もあるが、女房は知性もある。もつと若かつた頃は、

「あたしは若さと知性と美貌なのよ」

と、称していた。私が、

「人間というものはもつと謙虚であるべきで、そんなことを口にすべきではない」と難ずると、

「これはクレージー・キャッツの文句よ。あなたつて、ジョークもわからないの」

と一笑に付したが、半分は本音だったかも知れない。

そのとおり女房は知識欲も旺盛で、娘が大学生になつて手がかからなくなった頃から、カルチャー・センタ―にしきりと通うようになった。何を習っているのか知らないが、おそらく「源氏物語」とか「ワープロ」などという講義を聞いて、更に知性に磨きをかけているのにちがいない。

娘が結婚して家からいなくなつて、もつと時間ができると、テニス教室などにも行きだした。女房がいまいとかなり不便なこともあるが、そうやつて健康にまで留意してくれるのはまことによいことだと、私はすっかり嬉しくなつてしまつた。女房がいつまでも健康でいてくれることは、これまで長い年月そうであつたように、優しく私の世話をしてくれることにもつながるし、また女房は善意の持主であるから、人類のためにもなるとさえ私は考えたのだ。またテニス教室で運動するため、小柄で一見か弱そうに見える彼女も腕力がついてきて、年寄りになつて体力も衰えた私が福神漬けのびんのふたを、いくら全力をふるつても開けられないで絶望しているときでも、女房がやつてみると実に簡単に開くのだ。男性以上の能力すら女房はすでに有していて、なんとも素晴らしい女性というべきであらう。

人類のためと大げさなことを言うのは、たとえば赤い羽根募金に出会つても、女房は私がギクリとしてしまうことに、千円札どころか一万円札も箱に入れてしまうこともある。その晩のお菜^{かず}が納豆だけということになつてしまう場合でもだ。アフリカの飢餓が報道されだされたときには、たちまちわが家の衣類の三分の一が消えてしまつた。もつとも寄付した衣類の大部分が私や娘のもので、どういう訳の訳がらか、女房自身のものは、ほとんど減らなかつたようにも記憶している。

最後に、私の一人娘のこと。ああ、わが娘が、どんなに素敵な、それこそ表現できぬほど可憐な、あたかもカグヤ姫のごとき少女であつたかを記すとなると、思わず知らず指先までが震えてくる。なにしろ、背は高からず低からず、目はパツチリと色白で、——いや、もうやめよう。い

くら繊細な童話作家でも、一人娘のこととなると、やはりどうしても錯乱するようだ。

娘の名前はミキという。女房は美奇という漢字にしようと言ったのだが、女房の名前でも、少々気持わるく感じていた私は、それではもっと気持がわるくなってしまうので、単純に何の意味もこめず片仮名にした。

そのミキは、親馬鹿の意識から無理に離れて、凄まじい努力により冷静に客観的に考えてみると、さして美しいところはないばかりか、どこか間抜けな仔ダヌキにも似ていて、その名のおり単純で、そればかりか勝手気ままな娘であった。私には身分不相応な名の通った大学に入れてやるには、家庭教師をつけるなど金もかかったが、その費用の大半は女房の実家の援助によるものである。いくらずいぶんと気持をわるくして忍者物語などのアルバイトをやったにしても、私のように繊細にすぎる童話作家の収入なんて、まったくしがたないものだ。はたから見れば、ちよつとした庭まである二階屋に住んでいる私は羨^{うらや}まれても仕方のない存在だろうが、内情は経済的にも女房に頭があげられない哀れな男なのだ。

女房の実家は、大正時代からイモリの黒焼きをまともな薬として売^うりだした由緒ある家柄である。イモリの黒焼きは子供の寝小便に効くと言われてきたが、実は大人の男性にとつて、すこぶる著効ある精力剤だと宣伝して小金持になった。戦後はさすがにイモリの黒焼きの威光もすっかり衰えてしまったが、とはいえ、今でも達者で老人ボケもしていない女房の父、私の義父は、イモリの黒焼きの秘密の成分を抽出して近代的な錠剤となし、かつての熱血冒険小説作家の名声もすっかり失なつてもつと落ちぶれてしまった親父よりは、もちろんのことずっと裕福であつた。

人の好い義父が、それこそ若さと知性と美貌の権化であつたろう自分の長女を、私なんぞにくれてやる氣になつたのは、彼もまた子供のころ、親父の熱血冒險少年小説に血を沸かせた一人であつて、懷古と同情の念が最大の理由であつたことは確かなことらしい。

織細で小心な私は、ずっと女房を介して義父の世話になることに、申訳なさど劣等感を抱きながら暮してきた。ところが、單純至極なわが一人娘は、そんな父親の心情なんてぜんぜん察知せず、近代的女子大生になつてしまうと、いきなり自動車欲しいと言いだした。どうやらその大学の生徒はみんな車のある家庭の子であり、その大半は自分用の車を持つてゐるらしい。私が無理をして、半分は女房の実家の力も借り、ずいぶんと氣持もわるくして中古車を買つてやると、彼女はぜんぜん学校の勉強なんぞせず、その車を用いて友達と遊びまわつてばかりいた。もつとも近代的女子大生はアルバイトもよくやるようだ。娘は昼間はデパートの配達アルバイトをし、夜は駐車場の番人のアルバイトをし、夏休み全部をあまり暴力的でないヨット・スクールで子供の世話をするアルバイトをしたりして、かなりの金を稼いだらしいが、これまたぜんぜん學費の足しにする氣も起さず、すべて自分のための面妖めんような服を買つたり、デイスコに行つたり、酒を飲むコンパ代に使つてしまつた。

もつとも、娘は私と女房の双方からやさしい性質も受けついでいるから、私の誕生日には、「大好きなパパへ」と書いたカードをつけて、色パンツ一枚を贈つてくれた。しかし、その色パンツはいかにもけばけばしすぎるので、昭和ヒトケタ長老の私はすっかり氣持がわるくなつてしまい、残念ながら一度も實際にはくことはしなかつたけれど、ともあれ娘のやさしい心根に、私

はヨヨとばかりに泣きぐずれたものだ。

そういうごく単純でやさしく、かつ勝手気ままな娘は、

「あたし、卒業したら、一流会社に勤めて、パパを楽させてあげる」

というけなげなセリフを吐いて、またもや私をヨヨと泣きぐずさせておきながら、デイスコとコンパとアルバイト以外まったく勉強もしないのに、どういう手段を用いて教授たちをたぶらかしたのであろう、すつと本当に、いざ卒業してしまうと、就職なんかぜんぜんせず、電光のごとくどこかの青年と恋仲になったと思ったら、たちまちにして夢物語や大衆小説の作り事のように、しかも現実には結婚してしまった。あまつさえ遠い九州の端っこなんぞへ行ってしまった。今から一年前のことである。

私はあまりの衝撃のため、娘が結婚した相手の青年が、一体何歳なのか、いかなる職業を持つのか、どんな顔立ちをしているのか、色パンツをはいているか否かというような重要な事柄さえ、一年も経った今でも未だにわからずにいる。

いや、その青年にもその両親にも確かに会って話をしたはずだし、結婚式にもちゃんと出たはずだし、そんなことはとうに知っていたにちがいないのだが、あまりの衝撃のため、その一切を忘れてしまったらしい。

ともあれ、いくら単純で勝手気ままでひどい娘とはいえ、たった一人のミキがあっけなく消えてしまうと、わが家はたちまち火の消えたように索莫^{さくぼく}たるものに変じてしまった。幽霊屋敷というほど気味わるくはないが、いかにもがらんとして空虚そのものである。

目に映る動く生きものといえば、女房と猫一匹と、たまに出てくるゴキブリくらいなものだ。その猫はかなり以前、ミキが拾ってきた野良猫で、仔猫のうちはまだよかったが、大きくなつてみると、もの凄く不器量で、その性質はただの小心というより偏屈といつてよい。この猫についてはまた書く機会もあろう。

女房とはとうに寝室を別にしている。結婚して以来、もちろんダブルベッドではないが、小さなシングルベッドを並べてずっと長いこと実に仲良く寝てきた。

うっかり今、「寝る」などと書いてしまったが、これにも各種の状態がある。私が言うのは単なる睡眠の意なのだが、少しは別の意のこともやはりあった。繊細な童話作家としては、その別な寝方をどう表現してよいか、考えただけでも氣持がわるくなってしまうのだが、つまり衣服のたぐいを取り去り極端に密接して、かなりむずかしい心情と態度、いやもつとも単純で原始的な……ほら、もう混乱してしまった。その別の特殊な寝方をもう何年も前から私は中止していた。

かなり以前のこと、私の中学校時代の友人が久方ぶりにやってきて、雑談しているうちだしぬけに、

「五十歳すぎて、まだ女房と寝るなんて男は変態だよ」

と言った。

この場合、むろんごく特殊な寝方のほうを指したのであろう。私はとうに五十を過ぎていた。そこでおったまげ仰天して、本当はもう少しの期間、たまにはあるが女房と寝たいとも思っていたのだが、即座にそれを中止してしまった。いくらか残念でもあったが、そんなことよりも、

自分を気味のわるい「変態」だと認識したくなかったからで、やむを得ずそうしたのである。あとになって、その友人はかなりの女愛好者であつて、女房以外の女とならいくらでも寝るらしいことに気づいたときはもつと残念な気がしたが、小心で繊細な私としては、そのような真似は想像することすらできない。

ともあれ、いったん、特殊な寝方を放棄した以上、女房と寝室を共にすることはまったくの無駄であると私は考えついた。これは世間一般の亭主の横暴な論理ではなく、やさしく繊細な神経から発した思考なのである。

つまり、一応作家である私は、よくあるように夜型人間であつた。むかしは徹夜して書いたりもした。齡をとつてからは早く仕事を打ち切るが、寝室のベッドに坐つてからも、その前にある作りつけの台の上で、ずいぶん長いこと本を読んだり、寝酒に用いるウイスキーの水割りを作るため、つい氷をガシャガシャさせたりする。隣に存在する女房は早くから眠つてしまつてゐるから、その眠りを妨げるおそれもある。事実、私が音を立てるたびに、女房は寝返りを打ったり、少し目覚めてしまふらしく口の中でムニャムニャ言つたりするのだ。もつと困るのは、たまにテレビの深夜番組に昔の名画があつたりすることで、それを見たいとは思ふものの、そうするとせっかく眠つてゐる女房を完全に起してしまうことになる。わが家には、テレビは寝室に置いてある一台しかない。また私は煙草もずいぶん吸うので、煙草を吸わぬ女房にわるいような気がしてゐた。

そんなこんなで、実にやさしく繊細な気持から寝室を別にするに決めたのだが、今になって